

長野県立歴史館たより

2019年 冬号 vol.101

特集

開館25周年記念特別企画

土偶展



中部高地の土偶

～暮らしに寄り添う小さな女神～

2019(令和元)年11月23日(土・祝)～2020(令和2)年2月2日(日)

中部高地における土偶文化の広がり

『土偶展』は、前号でご紹介した国宝5箇の展示(10月26日～11月10日)に続き、11月23日(土・祝)より、長野・山梨両県の土偶を網羅的に紹介する「中部高地の土偶」を開催します。

現代人も高い評価を与える国宝土偶は、偶然生まれたわけではありません。優れた土偶を求め、作り手を支えた土偶文化の裾野が広がっていた点が重要です。地域の縄文人の支持を受け、優秀な作り手は、より大きく、より美しく、洗練された土偶作りに精を出すことができたと考えられます。

共通した土偶文化の広がりとは、中部高地(主に長野県南半部～山梨県)の各地に、国宝「縄文のビーナス」に似た土偶が点在していることなどから知ることができます。一方、各々の地域には、決して上手とは言えないけれども、個性豊かな土偶が数多く存在しています。一箇一箇の土偶には、それぞれの縄文人の暮らしに即した願いや、ムラの成員に共通する祈りが込められていたと考えられます。

縄文に関連する「日本遺産」とのコラボ

本展は、長野・山梨両県にまたがる日本遺産『星降る中部高地の縄文世界』の構成文化財に含



山梨県釈迦堂遺跡出土の前期土偶 重要文化財
(釈迦堂遺跡博物館蔵)

まれる土偶を多く展示します。顔の作りや髪形といった、両地域の類似点を比べてみてください。また、新潟県の日本遺産『「なんだ、コレは！」～信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化～」から、津南町^{どうじって}道尻手遺跡の土偶を展示します。中期初頭～中葉には、新潟県と共通する「河童形土偶」が長野県内にも広がります。一方、中期後葉では、県境まで分布しながら、長野県内ではほとんど見られない「三角形土製品」があります。「星降る」縄文世界と、「雪国」縄文世界の影響関係や、こだわりの独自性にも注目してみてください。

いっせいに広まる土偶文化

縄文時代前期末葉(約5,600年前)まで、中部高地での土偶製作は低調で、山梨県^{しゃかどう}釈迦堂遺跡などでごくわずかにみられるだけでした。ところが、中期初頭から中葉の始め頃(約5,500～5,400年前)になると、中部高地と北陸や越後も含めた地



中野市姥ヶ沢遺跡出土土偶 (中野市立博物館蔵)



岡谷市目切遺跡出土の壺抱き土偶
市指定文化財（岡谷美術考古館蔵）

域で、ほぼ同時に土偶作りが盛んになります。

次第に大形で自立し、明確な顔のつく例（中野市姥ヶ沢遺跡など）が出てきました。

暮らしに寄り添う土偶

中期中葉（約5,300～5,000年前）には、さまざまなポーズをとる土偶が作られました。多くは、女性の妊娠した姿を表現しており、大きなお腹に手を添えた南アルプス市鋳物師屋遺跡の「ラヴィ」（重要文化財）などがあります。あるいは、豊かな食と、さまざまなモノを生み出す象徴と考えられる土器を抱いた例（岡谷市目切遺跡ほか）があります。このように土偶の姿に子宝と豊穡への祈りが直接表現されていました。

中期後葉（約4,900～4,700年前）には、富士見町坂上遺跡例（重要文化財）のように、両手を広げて天に祈るかのような「バンザイ土偶」が増加しました。

復活する土偶とその終末



辰野町泉水遺跡出土の仮面土偶
長野県宝（辰野美術館蔵） 撮影：藤瀬雄輔

中期末（約4,500年前）、寒冷化が進み中部高地で遺跡数が激減する頃になると、土偶の神通力も衰えたのか、ほとんど作られなくなります。そし

て、後期前葉（約4,200～3,900年前）に一時的に復活した土偶の多くは、仮面を被った姿に変わりました（辰野町泉水遺跡ほか）。大規模な列石



北杜市金生遺跡出土の中空土偶
（北杜市考古資料館蔵）

や配石を伴う祭祀が中心となり、祈りの世界における土偶の役割や姿も変化したようです。

後期後葉～晩期（約3,300～2,500年前）、北杜市金生遺跡例（重要文化財）などを除き、中部高地では、東北の遮光器土偶のような発達を見せることはありませんでした。そして、弥生時代に入る頃（約2,400年前）、土偶は骨を納める容器に役目を変え（山梨県岡遺跡ほか）、やがて作られなくなっていました。

土偶を楽しもう

11月23日以降の土・日・祝日、子どもたち（大人も可）に土偶の写生をしてもらい、作品を展示します。2月1日（土）に優秀作品の表彰式をしますので、挑戦してみてください。

11月30日（土）には、縄文人も食べたドングリなどで飾る縄文風リース作りを行います。

1月13日（月・祝）には、南アルプス市から「子宝の女神ラヴィちゃん」に来てもらい遊びたいと思っています。ぜひ、ご家族でお越しください。



工夫された酒造り道具の数々

長野県は酒造りが盛んな地域です。酒造りは江戸時代には信州各地で盛んに行われていました。1880（明治13）年には酒造家数1,047の統計記録があります。

ところで、手作業の時代、酒造りには数々の道具が使われていました。それは、同じ醸造である味噌や醤油造りより、酒造りの工程が複雑だからです。

酒造りの工程は次の通りです。①精米…原料の米を精白する。②洗米…精白した米を洗う。③給水・蒸米…給水させた米を蒸す。④製麴…蒸米に麴菌を加え、麴をつくる。⑤酛（酒母）仕込み…蒸米・麴・水を合わせた酛をつくり、酵母を培養させる。⑥酛仕込み…酛（酒母）に蒸米・麴・水を加えて酛をつくる。アルコール発酵が進む。⑦圧搾（上槽）…酛を搾る。⑧精成。⑨火入れ…60度以上で加熱・殺菌し、発酵を止める。⑩貯蔵。⑪出荷。

したがって、各工程に合う道具が必要でした。工程ごとに主な道具を挙げてみます。

①精米 バッター…米を搗くシーソー型の道具。箕…竹を編んだ道具で、米を選別したり運んだりする。万石・唐箕…選別の道具で、籾殻・粉などと米を分離させる。

②洗米 洗い桶、米あげざる

③給水・蒸米 つけ桶…米を水につける桶。ため…米を運ぶ桶。蒸桶

④製麴 麴蓋…一晩寝かせた麴を1升ずつに分けて温度管理する木器。200枚以上使っていた。ブンジ…蒸米を蒸桶から取り出す大しゃもじ。

⑤酛仕込み 暖気樽…ふた付きの樽。酛の温度を高めて発酵を進めた。ふたに熱湯を注ぐ穴がある。半切り…原料を入れる幅広い桶。搔き…取手付きの桶。櫓玉…酛をかき混ぜる木の平たい棒。

⑥酛仕込み 泡ガサ…仕込み桶。櫓玉…酛仕込み用より柄が長い。くみかけかで、ため

⑦圧搾 酒槽…酒袋を入れて搾る槽。桃桶…酛を酒袋に入れる時に使う桶。酒袋…酛を入れる袋。カスリ…大桶の底にたまった酛をかき出す、ちりとりのような道具。

⑩出荷 酒瓶、じょうご、樽（販売用）

このように、用途に応じてさまざまな道具が工夫され、使われていました。使いやすいように形や大きさなどの改良がされてきたと考えられます。この道具を作るには桶屋などの職人の力が欠かせません。釘も接着剤も使わず、水分が洩れないように板の角度を調整して作った桶や樽。その板が外れないように巻いたタガ。タガは何本かの竹をひねって固定していました。

こうした自然の材料を巧みに利用した道具を作る知恵や技術には驚くばかりです。しかし、時代の流れにより、道具とともに知恵や技術も失われつつあります。今、後世への伝承が必要ではないでしょうか。（畔上不二男）



た め



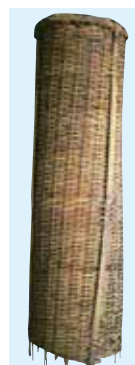
搔 き



麴 蓋



暖気樽



くみかけかで

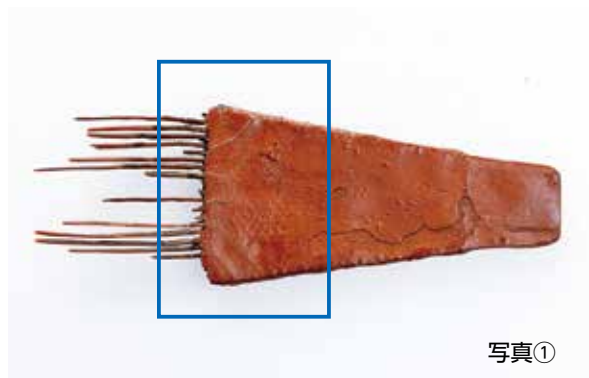


桃 桶

（坂井銘醸株式会社 蔵）

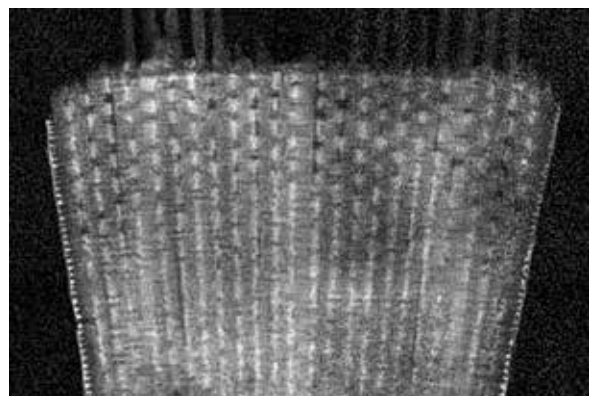
松原遺跡出土の赤色漆塗り豎櫛

(その2:X線断層撮影による構造観察)



4年前のこのコーナーで、1990（平成2）年に県埋蔵文化財センターが発掘調査した長野市松代、松原遺跡で弥生時代中期の土器片などと一緒に出土した「赤漆塗り豎櫛」の構造を紹介しました。発見から間もない時期の医療用レントゲン撮影や4年前の高精細デジタルセンサーによる平面X線透過観察から、次のことが判りました。

①24本の竹製の細棒が赤漆塗りの柄の内部で11cm分整然と遺存しており、最も幅の狭まった柄の要の端部より3cmの箇所から竹棒が露出するまでの長さ8cm分の範囲を細い紐で丁寧に編み込んで固定されていました。②しかも、その範囲がほぼ一定の角度（計測値は中心軸から左右に約9度）で広がるように、紐の編み方の粗密を調整して末広がりにしています。③紐の編み方については、24本の竹棒に、緯（よこ）糸状の細い紐を竹棒2本一組毎に編み目が疎の範囲は紐3本もしくは2本で並行させて、密の範囲ほど紐2本



平面X線透過画像（上掲写真青枠内）写真②

もしくは1本でクロスさせ（裏側に廻し）ています。さらに両端の竹棒（1本目と24本目）の外側で紐を百数十回折り返し、クロス位置を竹棒1本分ずらしては戻して繰り返す手順であったことがうかがえます。

ただ、③の紐の編み方については、紐本体と確認できる箇所はほとんどありません。かろうじて、紐の痕跡としての腐食後の空洞の形状と、櫛の表側から裏側およびその逆に紐がクロスして緩いV字形に凹み上から塗られた漆が厚く溜まった箇所のX線透過量の差異（前者は多いため黒色の、後者は少ないため白色の影として）から推測しています。

今回これらの推測の可否を確かめるため、横断面断層スキャン（走査）撮影（X線CT）を試してみました。得られた断層画像からは、①横一列に並んだ24本の竹棒が1本もしくは2本一組毎に緩いV字形の凹みに挟まれていること（写真③）、②そこから数ミリ離れた隣り合う部分の断層画像（写真④）では、緩いV字形の凹みの位置が竹棒1本分スライドして、さらに数ミリ先で元の位置に戻っていることが判りました。紐の痕跡と思われるものは散見できますが、編み込み自体の確認には至っていません。

画像の解析を進めて、構造の全容確認に近づきたいと考えています。（白沢勝彦）



写真③



写真④

横断面断層画像：上掲写真青枠内を左から見た横断面。緩いV字形の凹み位置が竹棒1本分スライドしている。（エクスロン・インターナショナル(株) 提供）



縄文土器胎土からの視点

日本列島の焼き物のうち、縄文土器は粘土と「砂」を原料としています。原料土である粘土を採取した後に不純物の篩い分けや混和材の添加を含む粘土の精製を行い、練ってから一定期間ねかせ、成形・調整・施文をおこない、乾燥をさせてから焼き上げます。

そのうち粘土の選択は特に重要です。粘土によっては腰が弱い、可塑性が低いなどの理由で、細かな成形ができない場合があります。特に大きな土器ほど組み上げていくのが難しかったことでしょう。逆に粘性の高い粘土は水を含み易いため、乾燥が不十分だと焼く際にひび割れを起こします。

以上のようなリスクを回避するために、縄文人は砕いた「岩石」や、河川などから採取した「砂」を「混和材」として粘土に加えたり、多種類の粘土を混ぜ合わせたりしたとみられます。それらは顕微鏡で観察することによって石英、斜長石、花崗岩、安山岩などさまざまな種類が確認できますが、粒径が0.06～2mmくらいなので、地質学の区分では「砂」に分類されます。また、採取場所によっては、粘土層への火山灰の降下や地滑り堆積物の混合などによって粘土中に既に砂が含まれているため、縄文人がわざわざ混和しなくても土器の生地として使用できる場合もあったとみられます。また、砂は、緩衝材となって熱による伸縮性を小さくすることから、繰り返し火に掛

けられる際の割れを防ぐ効果もありました。そのため、砂の量は鍋として使われた深鉢では多く、盛りつけ具である浅鉢や、急須として使われた注口土器では少ない、という違いも観察できます。

1993（平成5）年の発掘調査で千曲市屋代遺跡群では、縄文時代中期後葉の土坑や住居跡から、焼けた粘土塊が複数出土しました。それらを偏光顕微鏡で観察すると、0.2mm以上の岩石・鉱物が全く入っていませんでした（写真1）。一方同遺跡から出土した縄文土器にはどれも1mmを超える石英や斜長石などの砂が多く含まれています（写真2）。もしこれらの粘土から土器が製作されたとしたら、かなり多くの砂を混和材として混ぜなければなかったことでしょう。同遺跡からは混和材に用いられた可能性のある風化した深成岩や、土器などのみがきに使ったとみられる表面が擦れて光沢を帯びた小形扁平の磨石類も出土しています。このことから実際に土器が製作されていた可能性が高いと考えられます。

縄文時代前期の後半から中期、東日本の縄文土器の形や装飾はそれ以前に比べて複雑化します。粘土を貼り付け、さまざまな工具で器面を刻んで描かれる文様は、集団間で競い合うように豪華さを増していきました。意図した形に成形し、割れることなく焼き上げるために、縄文人は原料土の精製をより一層工夫し、技術に磨きをかけていったのです。（水沢教子）

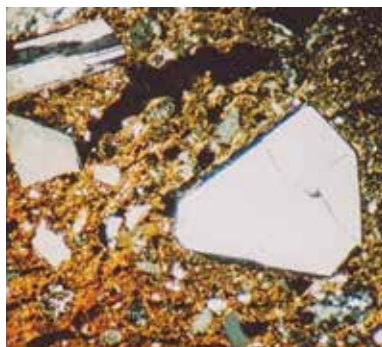
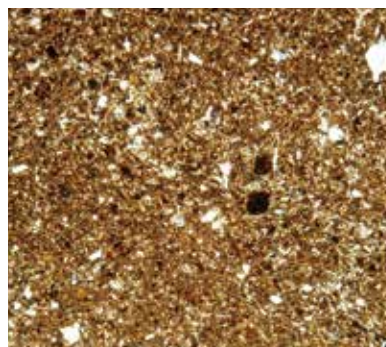


写真1 縄文中期後葉焼粘土 単ニコル 写真2 庄痕隆帯文土器胎土 直交ニコル
(屋代遺跡群出土資料偏光顕微鏡写真／当館蔵)

参考文献

- 清水芳裕2010『古代窯業技術の研究』柳原出版
- 水沢教子2014『縄文社会における土器の移動と交流』雄山閣

弥生時代の紡錘車 —織りに想いをはせる—

① 糸を紡ぐ紡錘車

考古資料に紡錘車と呼ばれる資料があります。土や石、骨などの素材で作られており、弥生時代以前は円板状をなすのが特徴です。大きさは50円玉や100円玉、時には500円玉程度の大きさまで、いくつか種類があります。おそらく重さにより使い分けられていたのでしょう。特に円板の中心部分に穴のある「有孔」例を「紡錘車（紡輪）」と認定することが多いようです。紡錘車は、そのみでは完全なものではなく、軸（紡莖）を挿入または軸に挟み込むことにより完成されます。遺跡出土例は、すでに軸の失われた資料がほとんどですが、東大阪市鬼虎川遺跡例のように、22.6cm程の軸（ムラサキシキブ材）が残る例も知られています。

紡錘は「糸を紡ぐ道具」ですから、紡いだ糸から布を編み、あるいは織り込んで、衣服や袋、敷物などを作ります。縄文時代には苧麻や大麻などを原料とする「アングン」と呼ばれる編布がありましたが、土器底部の編み物圧痕から、すでに平織の技術の発達していたことがわかっています。また福岡市雀居遺跡の調査から、縄文晩期には原始的な機織り具の存在したことが推定されています。弥生時代には「弥生機」と呼ばれる機織り具が発達し、幅30cmほどの布が織られていたようです。



長野市松原遺跡
ほかの紡錘車
(常設展示室:
当館蔵)

② 長野県内出土の紡績関連資料

紡績関連の遺物には、繊維のもとになる原料、紡績具、編物や織物などの製品が想定されます。弥生時代に属する長野県内の出土資料には、これまで紡績具と織物とがあります。

紡績具は、弥生時代中期後半の飯山市小泉遺跡竪穴住居跡（S I 1号）に木製の緯打具（刀杼）とみられる資料残片が出土していますが、他には確認例がありません。最も数多い資料が紡錘車で、県内（特に北信地域）の出土数は近県に比べ突出しているようです。有孔例だけ取り上げても、長野市松原遺跡弥生中期（後半）面で329点、同市春山B遺跡竪穴住居跡で82点（SB08で15点、SB40で64点等）、同市檀田遺跡で28点以上となります。律令期に「信濃布」（麻布）として都に知られた特産品のルーツが、もしかすると弥生時代のころには熟成されていたのでしょうか。

一方、製品の出土例は断片的ながらも意外に多く、弥生中期の長野市榎田遺跡竪穴住居跡（第1468号）のわらじ状の織物断片（つる性植物の靱皮繊維）をはじめ、弥生後期では長野市春山B遺跡竪穴住居跡（SB10）出土の赤漆付着布（絹か）、佐久市西一里塚遺跡群木棺墓（SM07）出土の鉄釧付着物（絹）、辰野町荒神山おんまわし遺跡第2号周溝墓出土鉄釧付着物（繊維）などがあります。少なくとも弥生時代後期には、『三国志』東夷伝倭人条（魏志倭人伝）にみる桑で蚕を飼い、絹糸を生産する技術の賜物が、長野県（「赤い土器のクニ」）にも確実にもたらされていたようです。

現在、常設展で弥生遺跡出土の土製や石製の紡錘車、土器片利用の紡錘車を展示しています。

(町田勝則)

INFORMATION

インフォメーション

■2019(令和元)年度 12月～3月の行事予定

12月

休館日
2・9
16・23
29～31

秋季企画展

「中部高地の土偶」
～暮らしに寄り添う小さな女神～
11/23(土・祝)～2/2(日)



宮田村中越遺跡出土土偶

■講座

11/23(土・祝) 13:30～
「長野県内出土土偶」
寺内陸夫 (当館職員)

■ギャラリートーク

11/23(土・祝) 15:20～
12/7(土) 15:20～

※開始時間にご注意下さい。

■報告会

1/18(土) 10:00～
「長野県内出土の土偶をめぐって」

■シンポジウム

1/19(日) 10:00～
「(仮) 土偶の埋葬」

※全国的事例報告

会場：当館講堂

長野県土偶研究会・土偶研究会(全国)・長野県考古学会

■イベント

期間中の土・日・祝
土偶写生・ぬり絵大会
1/13(月・祝)
ラヴィちゃんと遊ぼう



※子宝の女神
ラヴィちゃんが
来るよ!

2/1(土)
写生等 優秀作品表彰式

講座・イベント

考古学セミナー②

12/1(日) 13:30～
「(予定) 黒曜石関係の研究」
(長野県考古学会員)

近世史セミナー

12/8(日)
研究テーマ「近世の災害と復興」
10:30～ 研究発表
13:30～ 講演
「(仮) 近世の災害とその復興」
(立命館大学歴史都市防災研究所客員研究員
北原糸子 氏)

第3回考古学講座

12/14(土) 13:30～
「石斧の製作
～旧石器から弥生、石斧製作の移り変わり～」
(町田 勝則)

県立歴史館の信州学講座

第4回 12/7(土) 13:30～
「土偶と土器胎土」
(水沢 教子)

信州学出前講座in安曇野 安曇野市豊科郷土博物館

1/25(土) 13:30～
「室町時代諏訪信仰を
広めたのは誰だ」
(村石 正行)

第5回 2/8(土) 13:30～
「受け継いでいく長野五輪の遺産」
(畔上不二男)

第6回 2/22(土) 13:30～
「ヨーロッパを目指した若き才能
荻原守衛・丸山晩霞・中村不折」
(林 誠)

第7回 3/7(土) 13:30～
「地域の縄文文化遺産を活かす」
(寺内隆夫)

「県立歴史館の信州学講座」は先着220名、当館講堂で行います。事前申し込みは不要です。聴講には常設展示観覧料(一般300円、高校生以下無料)が必要です。

1月

休館日
1～3
6・14
20・27

2月

休館日
3・10
12・17
25～28

3月

休館日
2・9
16・23
30

2020年 巡回展

長野県の考古学
(予定)縄文時代後晩期の暮らし
ほか
3/14(土)～6/14(日)

古文書講座 (事前申込制)

「ティーンズ講座」
3/25(水)～3/28(土)

表紙の写真の解説

開館25周年特別企画「土偶展」では、10月26日(土)～11月10日(日)会期中無休で、全ての国宝土偶5箇を展示します。

左上:「中空土偶 茅空」(函館市蔵)、右上:「合掌土偶」(八戸市蔵)、中央:「縄文のビーナス」(茅野市蔵)、左下:「仮面の女神」(茅野市蔵)、右下:「縄文の女神」(山形県蔵)

行事アルバム

*** 考古学講座 ***



7月20日(土)に、考古学講座「時代を映す匠の技」第2回「縄文人の材料選択と土器づくり～胎土と製作技術から～」へ県内外から98名の皆様にご来館いただきました。土器づくりの原材料の科学分析から粘土の採集地の特定をはじめとして、ヒトやモノの流れが解明できるという内容に、参加者は引き込まれていました。

*** 歴史館で夏休み ***



蝉の声で賑わう8月4日(日)、歴史館で夏休みへ588名の皆様にご来館いただきました。夏の太陽がキラリと照りつける中、歴史館には夏休みにぴったりのちょっと不思議なお話をみたり、縄文人になりきって記念撮影をしたり、夏休みの1日を楽しく過ごすお子さんやご家族の姿がたくさんありました。

*** 古文書愛好会 ***



長野県文化財保護協会総会において、古文書講座を受講した有志のサークル「古文書愛好会」が文化財保護功労者の表彰を受けました。江戸時代の日記等を翻刻し印刷・公開する活動や、未整理文書の整理を通じて地域の文化財をより市民に近づけてきた活動が評価されました。

長野県立歴史館たより 冬号 vol.101

2019(令和元)年9月19日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: <https://www.npmh.net/>

印刷 奥山印刷工業株式会社